

2024 年度「光華 EDUAL プログラム（リテラシーレベル）」 自己点検・評価報告書

2025 年 3 月 31 日
自己点検評価委員会

1. 自己点検・評価の実施と結果

本学「光華 EDUAL プログラム（リテラシーレベル）」について、2024 年度の実施状況および目標の達成状況の点検・評価を行ない、リテラシーレベルのデータサイエンス教育を概ね適切に実施していることを確認した。詳細は以下のとおりである。

2. プログラムの構成

本プログラムの目的は、Society 5.0 時代に向けてデータや機械学習・深層学習（以下 AI）を日常の生活、ビジネスの場で使いこなすための基礎的素養を修得することにある。そのために次の 3 つの学修成果を掲げている。

- (1) 「データを正しく読む力」や「データを正確に伝える力」を身につける
- (2) データや AI が社会でどのように活用され、新たな価値を生んでいるのかを知る
- (3) データや AI の利活用には公平性、公正性、プライバシー保護などに課題があることを理解し、利活用に際し人間中心の適切な判断ができるようになる

また、以上の学修成果を達成するため、本プログラムは次の 4 つの科目から構成されている。

プログラムでの位置づけ	科目名	配当年次／開講期間	卒業要件
必修	コンピュータ概論	1 年／前期	選択必修
	情報社会の未来を知る	1 年／後期	選択必修
	表計算スキル I	1 年／前期	選択必修
	表計算スキル II	1 年／後期	選択必修

3. プログラムの実施体制

本プログラムを中心とするデータサイエンス教育の推進および自己点検・評価を踏まえたプログラムの改善を目的として、「リベラルアーツセンター短期大学部データサイエンス教育検討部会」を設置している。

また、本プログラムの自己点検・評価については既存組織である「自己点検評価委員会」で行っている。

4. プログラムの修得状況

本プログラムは2022年度からはじめた。2022年度終了時点では、2022年度入学生に対する本プログラムの状況は、修得者数1名という最低の水準だった。その後、2023年度終了時点では、2022年度入学生の修得者数12名となった。率だと修得率17%となる。また、同時点で、2023年度入学生にも4名の修得者が出た。したがって、2023年度終了時点で計16名に認定証を授与した。2022年度終了時点からのこの増加は、下の「6. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況」に記している計画の成果が一定出たものと考えている。また、2023年度入学者については、2024年度終了時点で、修得者数10名、修得率19%と2022年度とほぼ同じ水準を維持しており、計画の成果が続いているものと思われる。

各年度入学生の本プログラム修得状況

入学年度	修得者数	修得率 (%)
2022	12	17
2023	10	19

全体数：2022年度 72名、2023年度 52名

さらに、プログラムを構成する4科目それぞれの各年度入学生に対する最終的な修得率は下表のとおりである。2022年度の自己点検評価での最も大きな問題は、「情報社会の未来を知る」の履修率が6%、修得率が4%と最低の水準だったことであるが、これが2023年度終了時点では大幅に改善された。さらにこの傾向は2024年度終了時点でも継続しており、約半数の学生がこの科目を修得するに至っている。したがって、「情報社会の未来を知る」の問題は解決されたものと考えている。

本プログラムを構成する科目の修得状況

科目名	修得者数		修得率 (%)	
	2022年度入学	2023年度入学	2022年度入学	2023年度入学
コンピュータ概論	34	18	47	35
表計算スキルⅠ	41	33	57	63
表計算スキルⅡ	27	22	38	42
情報社会の未来を知る	19	26	26	50

全体数：2022年度 72名、2023年度 52名

5. 学修成果

(1) 学修成果の可視化

本プログラムの学修成果は「2. プログラムの構成」に挙げた(1)～(3)の3つである。

本学では、ディプロマポリシー等の学修成果の可視化を次のように行っている：各科目の到達目標（各3つ）の達成度を教員、学生それぞれが5段階で評価する。これらの数値を、重みをつけて集約することにより、関連するミドルレベル・ディプロマポリシー（本学独自の指標）、ディプロマポリシーの達成度を定量化している。

本プログラムの学修成果の可視化にもこの方法を用いる。すなわち、プログラムを構成する4科目のそれぞれの到達目標（計12個）を本プログラムの（1）～（3）の学修成果と関連付ける。そのうえで、各科目の到達目標の達成度評価を集約することによって、本プログラムの学修成果を定量化する。実際の結果は下表のとおりである。これらが、学修成果の可視化として、最も重視している数値となる。22年度～24年度の3年間を見ると、評価は3点台前半から後半の値となっており、ほぼ安定して推移していることがわかる。特に学生評価はこの2年間3点代後半で推移している。一方、教員評価は、23年度に一度3点代後半に上昇したものの、24年度は（1）と（2）で3点台前半に戻っている。

本プログラムの学修成果の達成度

学修成果	学生達成度自己評価			教員達成度評価		
	22年度	23年度	24年度	22年度	23年度	24年度
（1）「データを正しく読む力」や「データを正確に伝える力」を身につける	3.5	3.8	3.7	3.3	3.7	3.3
（2）データやAIが社会でどのように活用され、新たな価値を生んでいるのかを知る	3.5	3.9	3.6	3.9	4.0	3.4
（3）データやAIの利活用には公平性、公正性、プライバシー保護などに課題があることを理解し、利活用に際し人間中心の適切な判断ができるようになる	3.4	3.7	3.8	3.7	3.6	3.8

5点満点

（2）授業満足度調査

学生の内容の理解度については、学修成果に対する学生の達成度の自己評価として定量化したものを上の「（1）学修成果の可視化」の項に挙げておいた。

それ以外に、直接理解度を問うているものではないが、毎学期実施している「学生による授業評価」において、各授業の満足度を調べている。2024年度に「この授業に満足していますか」という問いに対して「そう思う」または「ややそう思う」と回答した学生の割合は次の通りであった。「コンピュータ概論」100%、「表計算スキルⅠ」83%、「表計算スキルⅡ」88%、「情報社会の未来を知る」87%。いずれの科目も満足度は高い。ただし、満足度は内容の理解度を必ずしも表してはならず、学修成果の達成度の学生の自己評価は、5点満点で3.6～3.8点であることは、上の

「(1) 学修成果の可視化」の項に示した通りである。

6. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

2022 年度は本プログラムの履修者数は 1 名という最低水準の結果になってしまった。原因は、本プログラムの周知徹底に問題があったことと、「『情報社会の未来を知る』は難しい」という根拠のない評判がたったことである。

そこで、2023 年度は、次の 2 つの対策をとった。1 つ目の対策として、前期のオリエンテーション時に本プログラムについて説明するのはもちろん、前期の 2 つの科目の履修者に対して、前期終了時に、本プログラムを履修するためには後期も 2 つの科目を履修する必要があることを注意喚起し、さらに後期のガイダンス時にも本プログラムについてアナウンスを行った。また、本プログラムのアナウンスは 1 年生に対してだけではなく 2 年生に対しても行った。2 つ目に、本プログラムの修了者のコメントも紹介することによって「情報社会の未来を知る」は難しいという誤解を解いたことである。

さらに 2024 年度に向けて、本プログラムを「履修の手引き」にも掲載することにより、学生への周知をさらに徹底した。

これらの対策によって、「4. プログラムの修得状況」にあげた履修状況の改善につながった。

7. その他

2022 年度の報告書では、大規模言語モデル（以下、生成 AI）を念頭に「今後、(本プログラムの中に) AI の発展を積極的に取り入れ、自学自習のあり方も含めて授業を工夫していくことを検討していく」と記した。その後、2023 年度を通じた実際の利用により、生成 AI の特徴が明らかになり、ライフデザイン学科の目標（コミュニケーション能力の育成）の観点からの生成 AI の位置付けについての理解も深まった。

生成 AI におけるプロンプトエンジニアリングの重要性を踏まえ、2023 年度報告書では次のように述べた。「従来、コミュニケーションは、人対人のコミュニケーションを前提としてきたが、生成 AI の登場により、コミュニケーションの意味を広くとらえるべき可能性が広がった。本プログラムにおいても、『人対 AI のコミュニケーション能力の育成』の観点から生成 AI の活用について検討していく。」

以上の生成 AI の活用についての考えを踏まえ、2024 年度は本プログラムの構成科目である「情報社会の未来を知る」で生成 AI を取り上げたほか、(本プログラムの構成科目ではないが) 必修科目である「社会を知る」でもプロンプトエンジニアリングの実習を行った。今後、さらに社会での生成 AI の活用の実態も踏まえ、カリキュラム、授業内容を改善していく。